

モンゴル語の母音調和と母音の弱化

—外来語を用いた分析—

京都大学大学院 植田尚樹

モンゴル語には、母音調和と母音の弱化という、母音に関して特徴的な 2 つの現象がある。モンゴル語の母音調和には、男性母音 a,o,u と女性母音 e,ö,ü は共存しないという「咽頭性の調和」と、円唇広母音 o,ö の出現に制限を与える「円唇性の調和」がある。中性母音 i は、初頭音節以外の位置では母音調和に無関係である一方、初頭音節では女性母音として振る舞い、男性母音の後続を許さない。母音調和の領域は接尾辞にまで及び、ほとんどの接尾辞は母音調和による交替形を持つ。本来語では語幹内の母音の配列、接尾辞の母音ともに規則が確立されている。一方、外来語は母音配列の原則に従わないことがあるが、その場合の接尾辞の選ばれ方について詳細に扱った研究はほとんど見られない。

一方の母音の弱化は、第 2 音節以降の短母音が著しく弱化するという現象で、これまでにその音韻解釈について多くの提案がなされてきたが、決定的な解決策は見出されていない。この問題を扱う上では、もはや本来語のデータのみならず、外来語や母音調和との関連など、広い視野を持って分析を行う必要があると思われる。

これらの状況を踏まえ、①外来語、特に母音配列の原則に従っていない語（例外語幹を持つ語）における接尾辞の母音調和はどのような規則に支配されているのかを明らかにすること、②外来語でも母音の弱化は起こるのかを確かめること、③母音調和と母音の弱化との間には関連性があるのかを調べることを、以上の 3 点を本発表の目的とする。

調査方法は、外来語（主に例外語幹）をデータとして用い、それぞれの語に奪格接尾辞-aas⁴ (-aas/-oos/-ees/-öös) 《～から》を母語話者に付与してもらうことによって、接尾辞としてのどの母音を持つものが選ばれるかを調査した。また、それぞれの語の発音、及びキリル文字の正書法による筆記により、母音の弱化が起こっているかを調査した。

調査の結果、基本的には語幹の最後の母音が接尾辞の調和を決定しているが、外来語における e は、i と同じように母音調和に無関係であることが明らかになった。また、語幹に e しか現れない場合は女性母音として振舞うという点でも、i との並行性が見られた。このことは、標準モンゴル語で i と e が合流しているという事実からも裏付けられる。また、個人差や語による違いはあるものの、アクセントを持たない母音が弱く発音される場合があること、綴り字上で母音が消える場合があり、これは本来語で母音の弱化が起こる際の綴り字の規則に類似していることから、外来語においても母音の弱化が起こる場合があることが分かった。さらに、アクセントのない母音が、語幹末の位置であっても母音調和を引き起こさない例も観察された。

以上の結果から、①接尾辞の母音調和を決めているのは、i,e を除いて最も語幹末に近い母音であり、e は i と同じく中性母音として働いている、②外来語でも母音の弱化が起こり、それが綴り字上に現れることもある、③母音調和と母音の弱化には相互関係がある、という結論が導かれた。